Column

踏み切りで考えること

府国保連合会嘱託　　亀井　励

家の近くに電車の踏み切りがあります。最近は、鉄道が高架化され、踏み切りの数も減っていますが、この踏み切りは、京都市内の主要道路にあり、自動車交通が多いにもかかわらず、一向に改良される様子はありません。

以前、電車の運行回数が少なかった頃は、あまり気にならなかったのですが、通学生や観光客が増え、運行回数が増えるにつれ、朝夕などかなりの頻度で閉まるようになりました。上下線の電車が踏み切りで重なるようにダイアが組まれているようですが、現実はそうはうまくいかず、上りが通って踏み切りが上がったと思ったら、すぐに下りが来てまた閉まるというようなこともあります。

自動車はさすが、警報が鳴り始めるとストップしますが、歩行者や自転車はそうはいきません。バーが降りきるまでにできるだけ渡ろうと、警報を無視して走ります。先日も、閉まり始めたバーをくぐって中に入り、うろうろしている高齢者を見かけました。

急いでいるのに邪魔だなあ、と思うと、あわてて渡ろうとしたり、電車が通過するのを待っていてもいらいらします。どんな気持で待っていようと同じなら、こちらの気持を変えたらどうだろうと思いました。「そんなに急いでどうなるの」と気持を落ち着け、警報が鳴ったらすぐ止まって待つことにしたのです。

効果はてきめん。危険もないし、いらいらすることもありません。それだけ遅れたからといって支障が出ることなど何もありません。気持の問題だけだったのです。信号待ちでも同じことです。待ちきれずに渡る人や自転車を多く見かけます。若い人だけでなく、高齢者にも待ちきれない、という人がかなりあります。エレベーターで行き先ボタンのあとに必ず「閉」ボタンを押す人にも言いたいのです。

「そんなに急いでどうなるの」